

羅津から撫順へ

静岡県 福地 孝

一 衝撃

昭和二十（一九四五）年、私の家族は羅津にいた。羅津の人口は約三万人、そのうち日本人は約九千人で、満鉄関係者は家族を含め約六千五百人、私の父も満鉄社員であった。

羅津は日本内地の京浜工業地帯と新潟と羅津と満州各地へと重要な物流ルート、満州側の玄関口として満鉄により建設された港を中心とした都市である。このころの朝鮮半島北端のこの地域は、日本中で一番安全な場所と見られていた。六月に沖縄が米軍によって奪取された後、七月初めから大連、旅順、釜山、仁川などの各港は潜水艦と機雷によって封鎖され、残る羅津が攻撃の対象となってきた。羅津が封鎖されれば人の往来は勿論日本内地への食糧輸送も不可能になる。それ

故、国は全力を挙げてこの最後の砦を守るため、陸軍は羅津防衛のために高射砲部隊を増強した。

米軍のB-29は二、三機で一晩おきにやってきて、港を封鎖するために落下傘を着けた機雷を投下していった。港を囲む三方の山頂から照射する探照灯の黄色い光に捕らえられたB-29めがけて高射砲を撃つのだが、高々度で飛ぶB-29には届かず、高射機関砲の曳光弾も、むなしく闇の中に消えるだけであった。この光景は、むしろ奇麗にさえ見えて、映画を見ているような気持ちになり、一とき戦争を忘れさせた。羅津港は、内地防衛のため転出する軍人に乗せた輸送船や、大豆などの食糧を内地に送る貨物船などで何時も混雑していた。七月二十二日、出港しようとした貨物船「長陽丸」が触雷、大音響と共に船の三倍ほどの水柱が上がった。水柱が収まると船は舳先を天に向け、「ボー！ ボー！」という悲しげな汽笛を鳴らしながら羅津湾深く沈んでいった。次いで八月三日、不運にも「神影丸」が触雷し、これはかろうじて

沈没は免れて防波堤近くに座礁したが、いずれも白昼、府民三万人の目の前での出来事であった。

連続して起こったこの事件で、機雷のすさまじさを見せつけられ緊迫感、不安感が一気に頂点に達した。戦争が我々のすぐ身近に迫ってきたのである。度重なる召集が、不安を一層大きくした。父や夫たちは、後ろ髪を引かれる思いで家族の元を離れたのである。軍は、本土防衛や南方戦線のために引き抜いた精強関東軍の穴を埋めるため、四十五歳までの男子を根こそぎ動員した。しかし戦車、大砲はおろか、小銃も弾薬もなく、武器を持たない裸の軍隊だったのである。一方、家庭は女、子供と老人だけが残されることになった。

二 戦場に取り残される

昭和二十年八月九日午前零時、突如ソ連軍が参戦した。「今夜はB-29が来ない日だからゆっくり休もう」ということで安心して就寝したが、大地を揺るがす爆音で目が覚めた。

バリバリドシンという大きな音で目が覚めた。

ただごとではないことはすぐ分かった。窓から外を見ると、空には照明弾がゆらゆらと打ち上げられて、港も街も真昼のように明るく照らし出されていた。爆弾が投下され、爆発音で窓ガラスがビリビリと響き、天井の漆喰がバラバラと落ちてきた。このころになって、やっと警戒警報抜き空襲警報サイレンが鳴った。いつもとは様子が違っていた。時計を見ると午前零時を指していた。最初は米軍の航空母艦から飛び立った艦載機の攻撃だと思っていたが、近くに墜落した飛行機が赤い星のマークを付けていたのを見て、敵はソ連軍と知り腰が抜けるほど驚いた。ソ連軍とは「相互不可侵条約」が結ばれていたから、攻撃されることが万が一もないと思っていたので、関東軍を本土や南方に送ったのではないか。ただ、羅津は国境の要塞地帯だから、ここには関東軍の精鋭部隊を残しているはずだと思っていた。この防衛線は簡単に破られないと信じていたのである。

翌十日は晴天であった。レンガ建ての満鉄社宅

の外壁には機関銃弾が突き刺さっており、家の中は割れたガラスとはがれた天井の漆喰が散乱して、足の踏み場もない有様であった。駅から港に通じる広い通りは、爆弾で至る所穴が開き、切れた電線が垂れ下がっていた。街路樹のポプラ並木は、幹が折れて歩道をふさいでいた。気が付くと、昨日あれほど頼もしく応戦していた高射砲や機関砲が、朝から全く沈黙していた。早朝、情報収集のため司令部へ行った府尹（市長）が帰ってきて「要塞司令部はもぬけの殻、日本軍は夜中にどこかへ撤退したらしい」という衝撃的な事実を知らされた。これを聞いたときの気持ちは、どう表現したらよいか言葉が見当たらなかった。軍は、家庭から大黒柱の父や兄を軒並み召集しておきながら、ここ一番という大事なときに、「日本国民を護る」という最高の任務を放棄して先に後退したのは何事かと憤ったが、後の祭りとなった。我々は戦場に取り残されたのである。ソ連軍との国境までは、わずか四十キロメートル、戦車なら一時間足らず、

戦闘機なら数分の距離しかない。街は騒然となった。

三 一週間分の食糧を持って水源地へ

九日早朝、病院は入院中の患者を全員退院させた。この日は一日中波状攻撃にさらされたが翌十日は幸運にも朝方以来空襲の間が開いていた。午前十時ごろ、「山中へ避難する、一週間分の食糧を持って、隣組単位で水源地に集合せよ！」という緊急のふれが出された。隣組単位としたのは、留守宅家族が多いために、一人の残留者もださないようにその統率を組長に期待したのである。私の父は、仕事の関係で兵役にはついていなかったの

で、隣組長を務めていた。避難のための荷造りは大変であった。持ち出したいものは山ほどある。しかし必要な食糧を持つと、他に持てるものはほんのわずかである。赤ん坊を抱えた人は、おむつとわずかな食べ物のほかに何も持てなかった。だれもが銀行に行く時間もなかった。先に準備ができて表で待っている人

たちに何回も催促されて、迷ったあげくに手近のものだけを持って子供を背負い、何はともあれ家を出た。皆、何日かすれば家に帰れると思っていた。

家を出て、すぐに坂を登り、二時間ほどで最初の小高い山の頂に立った。眼下の埠頭では、入港していた貨物船と野積みの大豆の山が紅蓮の炎をあげて、真っ黒な煙に包まれていた。ときどき、ドラム缶が「ドカーン！ ドカーン！」と大きな音を立てながら吹き上げられている黒い煙は山の方まで流れて太陽の光を遮っていた。

四 このまま満州まで行く

避難民となった一団は、泣く子をなだめすかしながら山の中を歩いた。気持ちばかりが焦るが、足は思うように動かない。周囲はだんだん暗くなってきた。長い時間をかけて、やっと目的の水源地にたどり着いたときは、もう夜中であった。先着の人たちはもうそれぞれ眠りについていた。

出発時の指示では、水源地で一週間ばかり留ま

って様子を見るはずであった。しかし、情勢はそんな悠長なことを言っていられる状態ではなくなっていた。「すぐ出発する！ このまま豆満江沿いの会寧から満州に入る」という指示が飛んだ。

小さい子供を連れ、慣れない山道を歩き続けやるとたどり着いた目的地であった。みんな疲れ切つて、いったん休んだらなかなか動き出せなかった。あちらこちらで、けんか腰のやりとりが聞こえてきた。しかし「羅津に敵が上陸した」という声で、緩慢ながら一団は動き始めた。ぐっすり寝込んでいたところを、無理やり起こされた子供たちの泣き声があちこちで起こったが、泣きたいのは親の方であった。

避難民の列は、前方の山の峰から後ろの山の頂まで、一本の帯のようになって延々と続いた。集団から取り残されたら大変である。食事の時間も惜しい。夜もおちおち寝てはいられない。荷物が肩に食い込み足が棒のようになった。道の両側には、持ちきれなくなつて捨てられた荷物が転々と

転がっている。紙一枚でも重く感じるのである。こんなときでなければ、拾いたくなる物がたくさんあった。命の綱の米まで捨ててあった。

道端で休む回数が増えた。腰を下ろすとなかなか立てない。だれもが疲れ切って物も言わない。泣きながら歩いていた子供の声も聞こえなくなった。ただ、ひたすら歩いた。しかし、一日いくらかも進まなくなつた。そのころ、山の上から逆に麓に向かって降りてくる数人の男とすれ違つた。彼らはこの山奥の部落に住む農民だと思われたが、脇目もふらず山を降りていった。日本人が避難したのを見て、空き家になつた家が目的の人たちだと思つた。朝鮮の山ははげ山が多いのだが、この付近の山は例外的に木が鬱蒼と茂つていた。運悪く、毎日夜になると雨が降つた。漆黒の闇夜で、目隠しをされているようである。集団から離れないように、歩きながら眠つた。前を行く人の物音を頼りに歩いているのである。前の人が止まれば、ドンとぶつかつて目が覚める。山の斜面の木の下

でひと休みすると、雨で体がずると滑り落ちた。泥濘に足を取られて靴が脱げて、裸足で歩いている子供がいた。こんな山の中で日本軍兵士が我々を追い越して行つた。避難民は、子供や身に余る大きな荷物を持って苦労しているのに、兵隊たちは軽装で恨めしかった。

三日目に川に出た。橋が見当たらない。水深は大人の腰までであつたので、子供や年寄りには背負つて渡つた。獣道けものを歩いたり、急な坂道を四つんばいになって登つたこともあつた。最初はみんなまとまって歩いてしたが、次第にバラバラになつて、前後のグループとの距離も離れてきた。もう頭の中には、ものを考える余力はなくなつていた。

羅津からの避難民は、十四日夕方から十五日早朝にかけて会寧に着いた。会寧の街は、憲兵隊の放火によって猛火に包まれていた。軍も住民もひと足早く避難したようで、街中は無人であつた。我々は炎の中をすり抜けるようにして駅に向かつた。しかし駅もすでに炎に包まれていたため、二、

三百メートル離れた線路脇の空き地に集まった。疲れ切った大勢の顔、顔、顔。その中で知人や友人を見つけては、お互いの無事を喜び合った。

機関士たちは、ここで予備の機関車や客車、貨車などを集めて次々に四本の列車を編成した。避難民は先を争って列車に乗った。山の中で死んだ人も生まれた子もあつたが、何はともあれ生きて列車に乗ることができたのである。この先どうなるか分からないが、「もうこれで歩かなくて済む」というのが実感であつた。百キロメートルの道を、私と十歳の妹と五歳の弟は歩き、三歳の弟は母が背負い通した。

五 「日本の兵隊さんに殺してもらえば思い残すことはない」

避難途中で、近所に住んでいた一家に出会った。十歳になる娘さん、病名は分からないが長期入院していた。見るからに病人という感じで弱々しく、荷物を持たず杖を突いて歩いてきた。後日聞いた話では、百キロメートルの道を歩き通したと

のことであつた。また山中で産気づき、翌日には生まれたばかりの赤ん坊を負ぶって歩いていた人も見た。ご主人は応召中だと聞いた。後に撫順の収容所で姿を見かけたが、生まれた子は途中で亡くなったということであつた。

三日目だつたと思うが、以前隣に住んでいたMさんの若い奥さん、三人の幼い子供とおばあさんの一家五人が、ついに動けなくなつてしまった。隣組の人たちが、交代でおばあさんを背負つたり、子供を励ましたりしてここまで来たが、どんどん遅れてしまった。奥さんとおばあさんは「これ以上皆さんに迷惑は掛けられない」と、世話になつたことを感謝しながら朝鮮人の百姓家で、別れを告げたという。親しかつた人だっただけに、今でも記憶の中に焼きついている。

小さな子供が何人もいる人は、少しも気が抜けない。さつきまで一緒に歩いてきた子供がいらないのに気が付いたが、探しに戻るために他の幼い子供たちをここに待たせる訳にはいかない。気力も

体力もない、泣くに泣けない悲劇であった。

私が六年生のときの受け持ちのN先生は応召中であつた。二十九歳の奥さんが、六歳と四歳の子供を連れ、臨月のお腹でどうにか会寧までたどり着いた。しかし汽車には乗れなかつたのである。汽車が出てしまつた後、取り残された親子三人が駅前で途方に暮れている所へ、全く偶然にもZ先生が通りかかつた。Z先生は出張先の教育研修所でこの惨禍に遭い、ここまで逃れてきた。先生がもう何分か早くここを通つていたら、あるいは一本でも違う道を歩いていたら、会うことはなかつたであろう、奇跡としかいようがない出来事であつた。N先生の奥さんは地獄で仏にあつた心境だつたに違いない。そして藁をもつかむ思いでZ先生に縋つたであろうことも想像に難くない。どんなにか心強く思つたことであろう。四人はここから一緒に南下する道を選んだ。九月に入つてN先生の奥さんが白岩で産気づいた。同じ収容所に居合わせた産婆さんに取り上げてもらつて、生ま

れたのは男の子であつた。産室も産着も食べるものもない中で、その子は一週間ほどで亡くなつた。悲しむ間もなく四人はさらに南へ向かい、興南郊外の本宮にあつた工場の社宅跡に入った。ここは終戦直後の暴動によつて窓や扉や、もちろん畳も持ち去られ、屋根と壁だけの廃墟であつた。この冬は、気温は零下十度以下にもなる。風を防ぐため窓や扉にはござを吊したが、氷のような風は家の中を通り抜けていった。着ているものといえ

ば家を出たときの夏服である。

そこでN先生の奥さんが病氣になつた。口の中に悪性の腫瘍ができたのである。医者も薬もままならない中でなんとか医者に診てもらふことだけできたが、十一月に入つて衰弱が進み、看病の甲斐もなく最後の日を迎えてしまつた。大切な二人の子供を気にしながら先立つた奥さんの気持を察するとき、神も仏もどうして救いの手を差し伸べなかつたのかと思つた。Z先生は残された二人の子供と共に、この家で昭和二十年の冬をどう

にか越すことができた。そして二十一年五月、大勢の避難民と一緒に山の中を歩き続け三十八度線を越えたのである。その距離、実に二百七十キロメートル、東京・浜松間に相当した。もし会寧駅でZ先生と出会っていなければ、二人の子供はどうなっていたのだろうかと思うと「神もこの一家を見捨てなかった」と思った。避難中は、こんな悲しい出来事が幾つもあった。以下は私に届けられた手紙である。

「前略、私は昭和二十年八月十五日朝、満州より北鮮の会寧に着きました。そして、十七日まで避難民の誘導と、会寧の部隊の食糧や被服などを後方へ運ぶ任務につきました。忘れもしない八月十五日の昼ごろ、会寧駅で二十代の日本人女性が子供一人を背負い、両手に二人の子供を連れての逃避行に出会ったが、私の所へきてこう言いました。『もう子供は歩けません。どうかこの子を殺して下さい。日本の兵隊さんに殺してもらえれば、思い残すことはありません……』」

私は持っていた乾パン三袋を渡して「二百メートルほど先に避難所がある。頑張つてそこまで行きなさい」と言いました。とぼとぼと歩く後ろ姿を見送り「どうか無事日本へ帰つて」と祈るばかりでした。

無事日本に帰れたのか、そのときの情景を四十年間いまだに忘れることができません」と書いてあった。

六 悪夢

会寧からの一番列車の出発は十四日夕方であった。疲れ切った避難民を乗せた列車は上三峰駅カミサンボウで一夜を明かし、翌朝豆満江を渡つて満州国に入り図們駅トモに停車した。八月十五日の昼ごろであった。長い間貨車に詰め込まれていた避難民は、先を争つて水飲み場に群がり長い列ができた。トイレに行く人もいた。まさにそのとき、ソ連機七機が飛来し、そのうち一機が編隊を離れたと見る間に、列車めがけて爆弾を投下した。爆弾二発はホーム中央の水飲み場を直撃した。水飲み場にいた人た

ちと、すぐ横の貨車に乗っていた二百五十人が一瞬にして吹き飛んだ。横倒しになった貨車、ホーム、線路脇に血だらけの死体が折り重なっていた。負傷者のうめき声、親が子を探す叫び声、子供が親を呼ぶ声、硝煙の匂い、人の焼け焦げた匂いなど、まさにこの世の地獄、阿鼻叫喚というべき惨状であった。幸運にも助かった人たちは、一斉に駅前広場の防空壕へ走った。その逃げる人々めがけて、容赦なく何度も何度も機銃掃射が繰り返された。

長い時間が経って悪魔が去り、生き残った人たちが駅に集まってきた。親と離れてしまった子供や子供を見失った親が、夜遅くまで狂ったように探し回っていた。しかし、無情にもソ連軍戦車隊が近くに迫っていたため時間の余裕はなく、この人たちの多くはここで新たに編成された列車に収容された。

二番列車は、この爆撃時には豆満江鉄橋の手前にあるトンネル内で停車して難を逃れていた。こ

の列車に乗っていた人たちは、凶們の町のどこかが爆撃にあっているとは思っていたが、まさか先行した同じ仲間がやられているとは夢にも思っていなかった。深夜になって凶們駅に入り、仲間の目も当てられない惨状を見た。この二番列車と次の三番列車は早々に凶們駅を出たので、第二の危機を避けることができた。しかし、四番列車は情勢の悪化で鉄橋を渡れず、徒歩で満州の開山屯カイザントンに出て先行組を追うことになった。最後の列車が出た後も会寧に入ってきた人がいた。いずれも病人、妊産婦や年寄り、そして子供を抱えた母親などで疲労困憊していた。この人たちは先行した人を追って満州に入ったり、羅津に戻る人たちと別れ別れになったが、いずれも苦難の旅が続いたのである。

七 終戦の日

列車は撫順に向かった。凶們駅での負傷者や病人は吉林で下車し病院で手当てを受けることができたが、治安が急速に悪化してきたので、撫順で

先行組に合流した。十六日、列車が郊外で停車したとき物売りにきた中国人が「日本は戦争に負けて降伏した」と言ったが、それを聞いた人が憤慨して、その中国人を殺さんばかりの勢いだつた。

このときは皆で「デマに惑わされるな。日本が負けるはずがない」と話し合った。だが、途中で線路際にあつた軍の倉庫から、中国人が物資を運び出しているのを見て、私たちは敗戦を実感した。

列車が敦化トシカに停車したとき、日本兵が大勢群がっている日本人に軍靴を分け与えており、ここで日本敗戦の事実を聞いた。終戦の日以降、列車のダイヤはめっちゃめっちゃになった。停まったらいつ発車するか分からない。炊事も用便も必死であつた。このような混乱の中、八月十九日、一番列車が、続いて二十日二番列車、三番列車が撫順に到着した。撫順には満州各地から避難民が集まってきて、日本人の人口は二倍の八万人になつたといわれた。これらの人々は、日本人の学校や料亭や寺院に収容された。家財すべてを失い、会社から支給され

るお金はごくわずかで、その上インフレで満足に食へることもできなかつた。

八 小孩ショウガイ（子供）買マイ

避難行の疲れと飢えで体力が無くなつた子供たちは、発疹チフスの流行で毎日十人以上が亡くなつた。昨日は隣に寝ていた子、今日は反対側の子というようだった。このような中で、中国人が日本人の子供を買いにきた。男の子は六百円、女の子は六百五十円で買うという。子供がほしい理由は「優秀な日本人の子供がほしい」ということに尽きていた。避難民の子供は日一日と衰弱してゆく。子供一人を売つたお金で残つた子供に食べさせられるのである。これは、どうにもやりきれない気持ちであつた。中国人に引き取られた子は、残留孤児になつた。

九 幼い子供の饅頭売マントウマイ

私たちが撫順に着いたのは、八月二十日ごろであつた。ここでは、秋になると一足飛びに冬がきて、零下二十度になるのも珍しいことではない。

暖房施設のない収容所では冬を越せないと、満鉄社宅の人たちが一世帯ごとに一家族を受け入れてくれた。私たちも同郷のWさんの家にお世話になった。しかし避難民が次々と撫順に入ってきたので、この年の暮れには一間に一世帯が入るまでに混んできた。何とか冬が越せるようになったと喜んでいたら、避難民の中から発疹チフス患者が出て、受け入れ側の満鉄社宅の人たちにも伝染した。患者が多すぎて病院の施設が足りず体力のない老人、子供から大勢の人が死んでいった。

避難民が増えるにつれて、その生活をどうするかが問題になったが、撫順炭鉱当局の配慮で炭鉱の各部署に職を得ることができ、羅津鉄道局でも留守宅家族の避難民のために、給料の四〇パーセントを供出して助け合ったという。避難民も、働けるものは幼い子供まで首から箱を吊って街頭で饅頭や餅を売り歩くなどして、生きるための努力を精いっぱいしていた。私は炭鉱の総務部で働くことになった。

十 ソ連軍の進駐

昭和二十年八月二十七日、ソ連軍の先遣隊が米軍の大型トラックで撫順炭鉱にやってきた。翌日、本隊が列車で撫順駅に到着した。降りてきたのは東洋系の坊主頭の兵隊であった。そして撫順炭鉱事務所の新館と満鉄社宅街の一部を宿舍として接収した。女学校を宿舍としていた日本軍は、進駐してきたソ連軍に武装解除され、どこかへ連行された。それまで平穏だった街に暴動が起こり、中国人街に近い日本人の商店や家屋は軒並み家財はもちろん畳、扉、窓枠から天井板に至るまですべてはぎ取られ、建物は無惨な廃屋と化した。「ワー！ワー！」という暴徒の喚声が一月中旬こえ、ソ連兵による婦女暴行、強盗強奪事件が相次いで起こった。

銃声は昼夜の区別なく街の至る所で聞こえた。私たちは銃声が近づくと、ただただ早く通り過ぎるのを祈るばかりであった。女性は床下や天井裏に隠れたり、坊主刈りにして男装したが、それで

も被害者が出た。男性は銃を突き付けられ、時計、万年筆を奪われた。難民収容所にも自動小銃を持ったソ連兵が押し入り、毎晩のように女性の悲鳴が聞こえた。夜はまさに地獄であった。殺された者も出たがすべてやられ損で、街は完全に無政府状態になった。この時期、一部の地区で青酸カリが配られた。

十一 ソ連軍警備司令部

ソ連軍は炭鉱長宅を接収して、警備司令部を開設した。同時に日本側にも撫順炭硯総務部の中にソ連軍との折衝窓口が設置され、責任者と通訳十人、ほかに庶務担当として羅津中学生二人が選ばれた。その一人が私である。地元の撫順中学生をさておいて、羅津中学生が選ばれたのは、避難民に働く場を作ろうという配慮だと思った。庶務係の仕事は、主に通訳の人達の食事の準備、後片づけ、掃除などであった。本来は女性の仕事であるが女では危険ということで中学生になったようだ。

事件が起きて緊急電話が入ると、警備司令部の兵隊が通訳を連れて一台しかないトラックで現場に出かけたが、当時、日本人の家庭には電話はなかったし、ソ連兵は銃を持っているので日本人はどうすることもできず、犯人が逃走してから届け出ても後の祭りであった。夜間に行われるパトロールもおざなりで、たまに現行犯で逮捕されたソ連兵は、取り調べもなく営倉に入れられた。私たちが収容されていた小学校にも、夜「女を出せ」といつてきたソ連兵に門番の羅津中学四年生が射殺された。このソ連兵は、銃と外套を庭の植え込みの中においたまま逃走した。後に警備司令部で通訳に聞いたが、この犯人は逮捕されなかったということであった。このように警備司令部が的確に機能しているとは思えなかったが、二、三カ月経ったころには徐々に治安は回復してきた。暴行、強盗事件は少なくなり、繁華街の人も多くなってきたが、夜九時以降は外出禁止で一人歩きなどできなかつた。

このころ避難民の環境は厳しかった。金がないのである。手っ取り早く金を手にするには、石炭を取ってきて中国人商店に売るのである。炭鉱には銃を持った警備兵がいるから取りに行くのは命懸けである。炭鉱の管理者がソ連軍から八路軍、さらに中央軍に代わるどさくさにまぎれて、大勢の日本人が石炭を取りに行った。背に腹は替えられなかったのである。百五十メートル下の地底からリュックサックに詰めた石炭を背負って、数百段の階段を登らなければならないのは苦行であったが、避難民にはこれしか金を生み出す道はなかった。

十二 八路軍の進駐

撫順は、十月に入ると夜は相当冷え込む。このころになっても、開拓団にいた人たちが二人、三人と撫順の街にたどり着いた。衣服は破れ、形をなしていない。中には麻袋をかぶって、顔と手足だけを出した格好の人もいた。髭は伸び放題、顔は何日も洗ったことはないようなひどい姿であつ

た。年寄りや子供の姿は全くといていいほど見なかった。

開拓団の多くはソ満国境の僻地にあつて、ソ連参戦の情報が全く入らなかったもので、いつものように老人や子供を家に置いて、遠い畑で農作業をしていた。そこへ突然襲われたので、家には戻れず逃げるしかなかったそうである。家においてきた家族とはそのまま生き別れになったという。気の毒で声のかけようもなかった。

やがて春がきた。冬の間になくなった日本人はあまりにも多く、火葬が間に合わなかったので防空壕に入れて雪をかけておいたが、悪臭が漂うようになつてきたので、川原で薪を積んで火葬にした。その煙が幾条も幾条も天に昇った。

日本兵はシベリア送りになった。ある日、朝、家を出たまま帰って来ない人もいた。ソ連軍は人数を確保するため、兵隊でもない一般の若者まで連行して行つたのである。私の叔父も、この被害者の一人である。兵隊でもないのに、奉天（瀋陽）

から遠く東ヨーロッパのモルドバ共和国まで連行され、強制労働に従事させられた。年若い祖母は、叔父の帰りを今日か明日かと待っていた。昭和二十二年一月のある日、祖母を訪ねてきた見知らぬ人から叔父の死を知らされた。復員してきた隣町の人で、収容所で偶然叔父と一緒に同郷のよしみで、叔父の最期を見取ってくれたのであった。

当時は中華民国政府軍(中央軍)の勢いが強く、中国共産八路軍を圧倒していた。ソ連軍の進駐から半年ほど経った三月十日、朝からソ連兵が慌ただしく出入りしていつもと様子が違っていたが、そのうちに突然トラックに乗って引き揚げていった。

ソ連軍と入れ替わりに、撫順市郊外に駐留していた中国共産八路軍(中共軍)が入ってきた。今までソ連軍一色だった街が、一夜明けたらあそこに八路軍、ここにも八路軍という具合であった。八路軍の服装はまちまちで、粗末な綿の軍服あり

私服ありであった。後で分かったことであるが、日本の敗戦後に応募した新兵たちであった。しかし、彼らは暴行、略奪など絶対せず、この点ソ連兵とは大違いであった。八路軍は撫順でも兵員募集を始めた。職のない中国人が大勢応募した。日本人の中にも日本内地が混乱して餓死者がたくさん出ているなど、うわさを信じて引揚げをあきらめて応募する人がいた。

十三 国民政府軍凱旋

まもなく、中央軍が西から迫ってきたため街がざわめいてきた。日本人も中国人市民も不安な気持ちで見守っていた。四月末、両軍が市の郊外で衝突した。戦場が大きな川の向こう側で遠く離れていた。炭鉱ビルの屋上で戦闘を眺めた。自分の身に危険の及ばないよその国の戦いは、演習を見るような気楽なものであった。ただ、流れ弾に当たったら困ると思った記憶がある。戦場は遠くて細かいところまでは見えなかったが、大砲の弾が命中したのであろうか、ぱっと水平に閃光と

煙が見えた後、間をおいて「ドーン」という発射音が聞こえた。ちよつと時間が経って、着弾の土煙が上がるという具合であった。遠くで「パチパチ」という小銃の音も聞こえた。結局、この戦闘は八路軍の退却で幕を閉じた。八路軍は、退却にあたって中央軍の追撃を阻むために鉄橋を爆破した。中央軍による市街地での掃討戦もごく小規模で終わって、市民に直接被害を及ぼすことはなかった。

中央軍は八路軍の反撃を警戒して、すぐに大通りの交差点などには土嚢を積み上げて、トーチカを作り始めた。中国人や日本人の一般市民も勤労奉仕で手伝っていた。出来上がったトーチカは、三十人から四十人が入るくらいの大きなものであった。同じものが何カ所かに作られたが、心配した八路軍の反撃もなく、街にはひと安心という空気が漂った。

一カ月ほどして、中央軍の本隊が目抜き通りを行進するという話が伝わってきた。これを聞いた

私は、野次馬根性で見物に行った。集まった人数は思ったより少なかったが、それぞれ通りの両側に並んだ。中央軍は馬に乗った隊長を先頭に、ラッパ手がチャルメラのようなラッパを吹きながら進んできた。四列縦隊に並んだ兵隊が後に続いた。兵隊の装備や服装は、今までのソ連兵や八路軍とは比較にならないほどござっぱりとして立派であった。「米軍援助のおかげだ」という声が聞こえた。しかし、足元を見るとズック靴はまだいい方で、わらじ履きの兵隊が結構いた。ラッパの聞こえない列の後方では、兵隊の足並みがバラバラで大分疲れているように見えた。五、六百人規模の部隊の最後尾には、天秤棒で前後に大きなかごを担いだ兵隊たちが、十数人続いた。目の前に来たときかごの中を見ると、大きな鍋や釜だった。「日本軍はこんな軍隊に負けたのか」というささやきが聞こえた。

十四 待ちに待った引揚げ

ソ連軍が撤退して警備司令部は自動的に解散に

なり、通訳と私たち二人はそれぞれ元の部署に戻るようになった。庶務担当の二人は、撫順炭硯総務部に改めて配属された。中央軍が進駐してまもなく、会社の上層部にいた日本人社員は、重慶の中華民国政府から送り込まれた人たちと、また中堅以下の日本人管理者は中国人従業員から抜擢された人たちと、それぞれ交代した。会社の組織は以前と変わらず、交代して役職が外れた日本人の上に、それぞれ新任の中国人幹部が乗った形で仕事が続けられた。毎日の朝礼には、全員が起立して中華民国国歌を歌うようになった。

終戦後九カ月が経って、その間に日本軍からソ連軍、そして八路軍、中央軍と支配者が頻繁に替わり、その都度混乱があり不安や身の危険にさらされてきたが、炭鉱と鉄道輸送という二大業務は、一日の休みもなく従来通り運営され、日本人の危機管理能力と実績が高く評価された。ただ八路軍撤退のとき、炭鉱次長はじめ幹部十人ほどが理由も明らかにされず拉致されたまま遂に帰って来な

かった、立場の逆転した日本人達は戦々恐々であった。

中国人採炭夫は終戦と同時にどこかへ消えてしまった。その後を、日本人社員と避難民とが掘った。事務職の人や、やせ衰えた避難民には重労働であったが生活をたてる上からは、むしろ幸運であった。

中央軍が進駐してまもなく、将校たちが積極的に日本人女性に近づくようになって、親の頭痛の種が増えた。本当かそれとも単なるうわさか分からないが、蒋介石総統が「優秀な日本人女性との結婚」を勧めたということで、アプローチはかなり積極的であった。ボロを着て、食うや食わずの敗戦国民には、戦勝国の将校は颯爽としてまぶしく見えても不思議はない。「そのときだけ」のつもりがまたは「生きるため」だったのが、別れられなくなるまで進んでしまった人が何人もいた。奉天でも他の都市でも同様であったそうだから、全体では相当な数であったに違いない。羅津関係で

も、私が知っているだけでも結婚まで進んだ人が二人いる。引揚げ日程が決まって、親が慌てて娘を探したが見つからなかったり、親に逆らって残った人や、夫や子供を捨てた人もいた。

内地引揚げのうわさについては、今まで何度もあったが、その都度肩すかしを食っては失望させられていた。しかし中央軍が占領した所から引揚げが始まっているという事実が分かって、日本人たちは一日も早い中央軍の進駐を待ち望んでいた。その中央軍が進駐して、待ちに待った内地への引揚げが現実となった。日本人の顔に急に明るさが出た。引揚げ準備のために、大勢の人が市場に出るようになった。避難民だけでなく、撫順に住んでいた人たちも持ち帰ることができない家具や衣類を売りに出すようになって、市場は活気を呈してきた。

引揚げは避難民優先。その中でも病人、高齢者、留守宅家族の順序で乗船することに決まった。撫順での第一陣は開拓団、次に羅津からの避難民千

五百人であった。持ち帰りが許されたものは現金一人千円まで、荷物はリュックサック一個と両手に持てるだけ、時計は一族に一個だけと決められた。一切許可されなかったのは、宝石類、背景の写った写真、日記帳、本など印刷物、刃物類だった。

昭和二十一年六月一日、羅津の第一陣が小学校の校庭に集合して荷物の検査を受けた後、撫順駅に向かった。用意されていた列車は、周囲に枠がない一枚板の無蓋車であった。これではどう見ても動物以下である。第一に危険であるし、途中、中国人の荷物強奪も防がなければならない。回りに杭を立て、縄を幾重にも張り回し、それにリュックサックを縛り付けて人が落ちないように内側に座った。ここまですべて雨は防ぎようがなく、降れば濡れであるが、待ちに待った内地に帰れる嬉しさが先に立った。私たち一家六人は、六月三十日、撫順を出発した。